

第三百四十四回 青葉会

平成二十六年十一月二十七日(木) 午後六時〜九時 丸紅来客食堂(談話室)

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生(入院中)

〈出席者〉

〈投句〉

〈紙上選句〉

今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 後藤保明 中野一灯 星田啓子  
伊賀山そらお 久米五郎太 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか 福島正明  
古田昇 宮内規雄 山崎亜也 山内天牛 渡邊盛雄  
楠田彦十 川口孤舟 小西弘子 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 福島正明  
山崎青史 山本三恵 山内天牛

病窓の紅葉日々濃き恢復期

万里子

《選者吟》  
《互選句》

八点

ハロウイーン魔女が隣の夜のバス

五郎太 (恭・忠・孤・彦・弘・保・灯・隆)

(☆…下五↓夜行バス)

六点

☆ 坐りよき備前の猪口やおでん酒

一灯 (万・弘・彦・龍・敏・天)

五点

☆ 時化てこそ鱒大漁の佐渡ヶ島

紀久男 (万・弘・龍・灯・允)

☆ 冬暮色一駅毎に闇迫る

恭延 (紀・弘・敏・青・天)

☆ 冠雪の富士より高き波濤かな

忠彦 (万・猛・灯・允・啓)

スパートへ走者手袋むしり捨つ

恵洲 (弘・灯・正・青・天)

☆ 山茶花やサナトリウムへ坂長し

堂哉 (万・孤・弘・允・天)

☆ 湯豆腐や日々淡々と妻と吾

全 (万・猛・隆・青・三)

木枯らしや帰りし母の咳ひとつ

啓子 (紀・恭・彦・保・三)

(☆…季語重なるので↓「風を負ひ帰りし母の咳ひとつ」)

四点

☆ 師を見舞ふ紅葉見頃の井之頭

紀久男 (万・灯・隆・正)

☆ 年増より新酒の届く楽屋かな(大滝君の落語会)

全 (万・彦・敏・三)

(昨秋急死した志ん馬師の内儀より一升壺。落語カフェ)

☆ 冬寝床放送開始のラジオ聴く

恭延 (猛・正・啓・天)

☆ 踊り子の湯浴みせし宿谷紅葉

一灯 (万・敏・正・青)

☆ 海鳴りや鱈汁囲む蟹(あま)の宿

全 (万・紀・孤・允)

酔眼で鍋底さらふ夜寒かな

そらお (保・灯・隆)

(☆…「わ」↓「の」)

☆ 妻を呼ぶ鹿の鼻息早や白し

保明 (万・忠・青)

岩石を削る奔流紅葉濃し

ゆたか (猛・允・正)

(☆…しつかりと出来上つていますが、例句がありそうにも感じます)

ボヘミアの山羊にも問ふ罌雲

一灯 (敏・啓・三)

(☆…「もの問ふ」ことの中身を知りたい)

☆ 透明なギリシヤ神殿霜柱

正明 (忠・彦・隆)

☆ 停年の朝の陽差しや冬薔薇

亜也 (万・紀・孤)

☆ 江南の水路澄みゆく夫婦旅(市原さんの絵)

紀久男 (万・恭)

もみじばが尾根より里へ駆け降りる

猛 (忠・龍)

瀬戸の島秋の夕日に鎮まりぬ

全 (紀・敏)

小春日や青一色の天深し

恭延 (猛・龍)

(☆大景を詠んでいるので下五を現実的に締めたい。例えば「宙へ旅」など)

菊枯れる喪中の葉書届くころ

忠彦 (恭・保)

(☆…上五↓菊枯るる)

稽古場の空気温もり亥子餅(いのこ餅)

五郎太 (紀・青)

(☆…稽古場と亥子餅の関係をもう一步深めたい)

人形町焼きふぐつかむ指細し

全 (保・天)

(☆↓焼河豚をつかむ細指人形町)

一点

掃き終えて紅葉一葉（もみじいちよう）茶に浮ぶ

保明（猛・啓）

（☆↓掃き終へて紅葉の一葉（ひとは茶に浮かび）

健介（孤・保）

☆猪（しし）打ちの銃身眇（すがめ）茶碗酒

一灯（万・紀）

☆焼芋屋一年振りの美声かな

天牛（万・忠）

風呂吹食ふパリにも在（おわ）す魯山人

盛雄（紀・灯）

古稀の秋遂に抜かれし親不知  
（☆↓やうやうと親不知抜き古稀の秋）

紀久男（允）

濡れ落葉まとわりついて何告げる  
（☆↓「濡れ落葉」や「木守柿」などは擬人化気味の季語なので、これを用いて擬人化した句は作らないこと）

猛（恭）

雨戸開け光嬉しや小春空  
（☆↓「雨戸開け嘻嘻と小春の曙光浴ぶ」）

恭延（龍）

蒼穹に守られ楽し小春人

全（三）

木の葉散る弱きものから耐へきれず

忠彦（三）

小鳥来る旅の苦勞を語りげに  
（☆↓擬人法はなるべく使わないこと）

全（恭）

乳母車の老犬きりり冬日和  
秋深し闇に漂ふノクターン

保明（啓）

（☆↓「魯山人」とか「ノクターン」など固有名詞や特別な言葉に頼りすぎないこと…）

惠洲（隆）

猪（しし）鍋や老いて壮んの大胡坐

正明（孤）

（☆↓「壮んのは「壮んな」では如何？）

昇（紀）

守秘義務を律儀に守る木守柿  
月天心王宮で観ゆバリ舞踊

啓子（彦）

（☆↓バリ舞踊観る王宮や月天心）

全（隆）

いち番を号と云うらし木枯しは

啓子（彦）

すすき刈る染めを学べる友ありて  
（☆↓草木染学ぶ友在り薄刈る）

全（隆）

しいの実のがさこそパタリ森に居る  
（☆↓椎の実のかさこそポトリ森に在り）

啓子（忠）

寄鍋の友皆倒れ一人の餉（げ）

規雄（正）

木枯の夜半オリオンに気付き初む  
（☆↓言葉に振り回されぬよう詩情を深めたい）

亜也（龍）

干柿を縄に吊せしままもらふ  
（☆↓干柿を縄吊りのまま貰ひけり）

天牛（紀）

二才兒に一尾まるごと秋刀魚焼く  
（☆↓二才兒へ秋刀魚一尾を丸焼きに）

全（隆）

●次回青葉会

十二月十八日（木）年忘れ句会 午後5時半（丸紅 談話室） ※開始時刻注意

▲当季雑詠五句 投句二句

正月六日（火）吉例初芝居総見 新橋演舞場（昼の部）

一月二十二日（木）初句会 午後5時半（丸紅 談話室） ※開始時刻注意

以上 文責 紀久男

平成二十六年十一月句会報

一 今回は、先生始め病氣故障者多かつた上にドタキャンもあり、久しぶりの一ケタ出席者七名。投句十二名。句会の三日前(24日)、万里子先生お見舞に正明さん、保明さんと三鷹の野村病院に伺い、先生が杖なしで歩行訓練されておられるのに驚いたことを報告。先生の精神力・恢復の早さに皆さん感服し安堵されました。  
いつもの猛さんの披露で御覧のように五郎太さん、恭延さん、一灯さん、堂哉さんが好成績でした。

寄贈の酒は：啓子さんからの「八海山」純米吟醸、忠彦さんの「刈穂」大吟醸(秋田)、小生の「壹醸」純米生酒(新潟・栃尾)。プレミアム・ウオツカ(朝妻さんより)と旨酒が揃い、翌朝検診者二人居りましたが、ものともせず飲み干した次第。

回覧は孤舟さんの句とインタビュー掲載誌『俳句』と『俳句界』の11月号。『俳句あるふあ』12月号。弘子さんの句の合評『萬緑』10月、11月号。きさらぎ句会掲載の『伊丹市公民館だより』、恵洲さん・そらおさんの三吟歌仙「蟬しぐれの巻」、初芝居の劇場のチラシ等。

二 関係者近況

精一杯のゾリの頭を撫で運動会  
秋立ちて予定予約の先走る  
二十年待ちし大役濃竜胆  
盆経も終へし煮物や取り分くる  
菊坂を惜しみ惜しみか帰燕どき  
経本の微かな手擦れ盆明くる  
乱れたるカンナの葉叢我慢我慢  
野分吹くビルの谷間の交差点  
灰寄せやいろいろのこと身に入みて  
みな無言ただひたすらに走り蕎麦  
流星その光芒追ひて逝きし人  
植木屋の腰に虫除けデング熱  
夏風邪や甘えん坊になる病

眞希子 風葬の島嶼を越えて鷹渡る  
全 浮かれて出て夜遊びに行く案山子かな  
全 地球儀の海は溢れず望の夜  
全 楊貴妃になりきつてゐる菊人形  
全 鱈汁や海荒る日は船の出ず  
全 凍鶴の相寄らざるを矜持とす  
全 「俳句界」12月号

「太功記十段目」の光秀  
月差すや額の傷のてらてらと  
身の芯の昭和や蕎麦の刻み葱  
冬紅葉常とは違ふ化粧して  
残さるる手押ポンプや一葉忌娘(こ)も孫も学びし学舎秋深し  
時雨るるや明治の気配路地小路  
柳散り楠旺んなる時計台  
菊坂に句帳開くや初時雨

紀久男 歳月の消しゆく望み枯尾花  
全 逆風やすすきほど我強くなし  
全 鬼女舞ふや薄つ原に恍惚と  
全 「きさらぎ句会」11月  
全 境内におでんの句ひ近松忌  
全 牡蠣船の灯ゆれゆる川面かな  
全 小雪の竹林に差す薄日かな  
全 革命の映画見し宵灯が恋し  
全 初冬や形而上てふキリコの絵  
全 崩し字に字類持ち出す小春かな  
全 大入りの顔見世一番猿之助  
全 富士氷る健さん計報一面に  
全 高座はね神保町の焼鳥屋  
全 出番了へ美女と火酒呑む果報者

「萬緑」 12月号  
身の芯の昭和や蕎麦の刻み葱  
冬紅葉常とは違ふ化粧して  
残さるる手押ポンプや一葉忌娘(こ)も孫も学びし学舎秋深し  
時雨るるや明治の気配路地小路  
柳散り楠旺んなる時計台  
菊坂に句帳開くや初時雨

弘子 崩し字に字類持ち出す小春かな  
全 大入りの顔見世一番猿之助  
全 富士氷る健さん計報一面に  
全 高座はね神保町の焼鳥屋  
全 出番了へ美女と火酒呑む果報者

萬緑吟行 11月

三 リハビリ中の先生に選句を依頼しました所、今までと異なるやり方の選と添削を頂戴しました。即ち○は佳句。赤○は部分添削。△は要注意の三種類。御覧のように厳しい選と的確な添削です。添削を全部掲載しておりませんが、実に勉強になります。御希望の方にはコピー差し上げますのでご連絡下さい。

尚、先生は年内に退院・帰宅のご意向です。

平成二十六年十二月十日

紀久男記